



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	紀海音の「場」と趣向
Author(s)	富田, 康之
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 106, 81-101
Issue Date	2002-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34015
Type	departmental bulletin paper
File Information	106_PR81-101.pdf



紀海音の「場」と趣向

富 田 康 之

はじめに

時代物浄瑠璃の趣向に関して言えば、一つの方法として「段」との関係から考察されることがある。時代物五段の全段に亘って考察した業績の一つに近石泰秋著『操浄瑠璃の研究』（昭和三十六年三月・風間書房）が挙げられよう。その中では、各段の性質・劇構造、及び繰り返し仕組まれる趣向等に関する考察がある。例えば三段目の趣向の例を挙げれば、「中心的趣向」として「死、身代り、切腹、殺し」を指摘し、「從属的小趣向」として「使者、子役、継母、やつし、対面、別れ、縁切り、身売り、改心、発心、詮議、手負ひ、物語、ほどき」を挙げる。また「中心的趣向」、「從属的小趣向」の両者いずれにも用いられる趣向として「心底、板ばさみ」についての考察に及ぶ。多数の浄瑠璃作品に目を配りつつ、当時の芸論にも配慮したそれら論考は十分に評価されるものである。しかしながらこの趣向につ

いての考察は、総論としての傾向を指摘したものであり、劇構造上の「段」の性質以外の条件については、更に検討する余地が残されているように思われる。本稿では、これまであまり関連させて究明されることがなかった「場」^{注1}と「趣向」^{注2}という関係から考察しようと思う。

さて、趣向がその内容により「場」に影響されることは、ある意味に於いては当然とも言える。例えば歴史的事実や伝承により「場」が決定される場合である。海音作『曾我姿富士』（正徳五年秋以前）四段目切では、虎と少将が二人同時に夢を見る。その夢は曾我兄弟が工藤祐経を「富士の巻狩」で討つというものである。この様に「場」と趣向が対になって仕組まれる場合もあるが、ここではもう少し別の関係を問題にしたいと思う。但しその場合、「趣向」が先に決定され、その上で「場」が選択されると考えるのか、また、その逆に「場」の決定が先行し、それによって「趣向」が仕組まれるのかという問題とも絡み合う。^{注4}通常、「趣向」が先に決定され、それによって「場」が決定されると考えるのが妥当とは思われる。しかし、「場」と「趣向」が本来緊密な関係を持たない場合でも、特定の「場」ではそれに対応する特定の「趣向」が仕組まれることも指摘できるのである。ここでは便宜的にどちらが先行するのかという問題には立ち入らない。以下、「場」と「趣向」との関係に問題を絞り、具体例を出来るだけ指摘するという方法によって考察を進めてみたい。

海音の「場」

最初に、海音の時代物浄瑠璃の「場」がどのように設定されているのか、その種類の概略を見ておきたい。^{注5}

「屋外」の場には、●街道・道^生中（街道筋、山科の里、有馬、山科、夜道、宿はずれ等）●森（信田）●山・山麓（山中、山畑、不忘山、生駒山、鞍馬山、鎌倉山、逢坂山、羽束師山、小塩山、別雷山麓、比叡山麓）●里（宇治の里、味間野の里、十符の里）●海上（沖合）●船中（松浦川船中）●浜（由比が浜、浜辺）●川・河原・池（宇治川、生田川、武庫川、広沢池）●橋（一条戻り橋、瀬田の長橋、扇の橋、佐野舟橋）●関（伊勢路新関、丹波口関所）●刑場●陣（武蔵野頼義の陣、逆柴陣所、悪路王陣地、硯が岡）●その他の屋外（小松引き、紅葉狩り、松原、松林、竹林、並木、あだし野、粟津が原、武蔵野、江ノ島、青野が原、醒ヶ井、こま沢堤、杉井村田園、芭蕉が原、芭蕉ヶ辻、福原、棕の木のある所等）となる。

「屋内」では、●屋敷（御殿、浪人宅、隠れ家、山家、化粧殿、記録所、山荘、庭、玄関先、飯屋、廃屋、茶室、將軍館、寢所、本陣宿等）●城（稲村が城、信虎居城、洲沢城、多多良瀉城、和泉が城、貞任城、了俊城、丹後田辺城、貞広城、室町城、城内等）●御所・内裏・宮殿（鎌倉御所、御所門前、鎌倉御所雪見の亭、東三条飯御所、山科御所、常夏住居、御所能舞台、紫宸殿、仮御所）●神社・寺院（鶴岡社、丹後国分寺、鶴ヶ岡八幡宮、三十三間堂、二尊院、住吉社、貴船社、三輪の社、陸奥社、藤沢寺、花山寺、飛鳥社、七の社、吉野神宮、河津廟所）●庵室（高円山王子草庵、新善光寺庵室、小倉山草庵、室積山里の庵、義尋庵室、三輪の山里庵室等）●廊（伏見、木辻吉田屋、三島宿、室、さがみ屋、手越里うつせみ屋）●小屋（非人小屋、浜小屋、牢小屋）●堂（辻堂、薬師堂）●店・茶店●湯屋等が挙げられる。また、参考までに国外の「場」を示せば、新羅国、琉球国宮廷尊閣、呉王宮殿、姑蘇台宮殿、玄宗宮殿、蜀の離宮、唐土近くの島、西湖畔の姑蘇台、越の国境湖畔、呉の東門、会稽山呉王の陣、安祿山の城、呉の城、長安の神社等という「場」が設定されている。

紀海音の「場」と趣向

ところで、大序及び三段目切の「場」については前掲書『操淨瑠璃の研究』に「大序の特質の第二は、その舞台がほとんど内裏・鎌倉御所・堀川御所・室町御所などの、將軍家武將の館あるひは神社仏閣の御前になつてゐることである。つまり多くの場合その時代における最も尊い厳かな場所が選ばれるのである。他の段の端場や三段目切の愁歎場によく選ばれる普通の民家や武家屋敷などの卑近な場所が大序の舞台となることはほとんどない。例外としてはむしろ山の中・川のほとりなどの屋外が選ばれることの方が多いであらう。屋外の方がかへつて大序の氣分を傷けないからである。」と指摘されている。

海音の場合も、大序では「鎌倉御所の段」（『鎌倉尼將軍』）、「内裏の段」（『愛護若疇箱』）、「將軍館の段」（『傾城無間鐘』）等が設定されており、城、御所、内裏、神社、寺院等の「場」は非常に多い。また三段目切では、「浅井主水浪宅の段」（『鎌倉尼將軍』）、「伊吹山木齋住家の段」（『花山院都異』）、「半蔵浪宅の段」（『頼光新跡目論』）等が設定されており、例外は存するものの、海音の場合でも言わば常套的な「場」が設定されていると考えられる。

さて、それ以外でも実に多様な「場」が設定されていることが分かる。勿論、それら全ての「場」に趣向との関係が認められるというものではない。しかし、その中の「廓」、「庵室」、「街道」等の「場」に関しては特定の種類の趣向が共通して利用されるという傾向を指摘できるのである。そこでこれより「場」と趣向の關係を具体的に指摘することにより、海音の特徴の一つを明らかにしようと思う。最初に「廓」の場を見てみたい。

「廓」の場と趣向

「廓」の場は、『鬼鹿毛無佐志鑑』四段目、『三井寺開帳』中之卷中・切、『曾我姿富士』四段目中、『甲陽軍鑑今様姿』一段目切、『傾城国性爺』二段目口、『日本傾城始』四段目中、『三輪丹前能』三段目切、『坂上田村麿』三段目切の都合八作品、九箇所設定されている。一段目から四段目までにそれぞれ仕組まれており（三巻構成の『三井寺開帳』中之卷の例を除く）、「廓」の場が特定の段と結びつくものではないことが分かる。但し、五段目には仕組まれておらず、一曲を終結させる「場」には相応しいものではないことである。また、時代物浄瑠璃の山場と考えられる三段目切にも利用されていることから見れば、浄瑠璃の「場」の中でも「軽い」ものとはばかりは言えない。

さて、『鬼鹿毛無佐志鑑』（宝永七年へ推定）四段目では、伏見撞木町に放蕩三昧の日々を送る大岸宮内が、子息力之介と力之介に恋する一文字屋遊女揚巻との取り持ちを引き受ける。その夜、二人きりとなった所で揚巻は力之介に力之介の母から預かった「文（手紙）」を渡す。母の手紙は力之介からの便りがない事を切なく嘆き訴えたものであった。手紙を読んだ力之介は、揚巻に母への伝言を頼みつつ母の過分の想いに涙を流し、覚えず知らず揚巻を抱きしめて二人は結ばれることとなる。その間の一部始終を父宮内は「立ち聞き」していたのであった。その後、宮内は揚巻を力之介に添わせたいと亭主に申し出て「身請け」する。宮内、力之介、揚巻が廓から出て三人連れとなった所、宮内は突然揚巻を刺す。揚巻の恨み言に宮内は力之介に忠を励ます為と諭すと、揚巻は納得して死ぬのであった。

この四段目での「廓」の場には、「文」、「立ち聞き」、「身請け」、そして「殺害^生」という生死に関わる趣向が指摘で

きる。「廓」の場となれば、身請けの趣向は相応しいものであろうが、他の場合はどうか。なるほど、「手紙」も相応しい趣向と考えられなくもない。しかし、ここでは「恋文」とは全く異なる「母」から「子」へのものである。そう考えれば、「立ち聞き」や「殺害」と同様に、たまたまここに取り入れられた趣向と理解できるかもしれない。ところが、これらの趣向は『鬼鹿毛無佐志鑑』に限らず、その他の作品の「廓」の場にもしばしば利用されていることが指摘できる。そこで、次の例を見てみたい。

『三井寺開帳』（正徳二年四月二十二日以前）中之巻は、中が木辻吉田屋門口、切が同吉田屋内の段となる。ここでは両段を合わせて「廓」の場と捉えたい。さて、吉田屋門口では、悪人の企みにより城を落ちた国の主頼母介が、紙衣姿で吉田屋の門口をうろついている。馴染みの茂介と出会い話をする所、格子の隙間からみ舟に呼ばれ、頼母介の愛人薄雲からの「文（手紙）」を受け取る。み舟は「先程よりかうしのすぎぢよつとおすがたみ覚へてうすぐもさまの文なげました」と頼母介に言う。舞台での人形の動きは不明であるが、「先程より」とあるからには、頼母介と茂介との会話を「立ち聞き」する演出があつたものと想定させる。そう考えれば、ここでも「立ち聞き」と「文」の趣向が指摘できるのであるが、ここでみ舟は薄雲の「身請け」に関する情報を頼母介に伝える。

切でこの「文」は、「うすぐもふみの段」として景事で語られる。文の内容は頼母介に薄雲自らを思い切れというものであつた。ところが頼母介は薄雲の本心を知り、なかなか思い切れないでいる。そこに薄雲の父ぢぶ太夫が身請け金三百両を持参する。続いて執権はたの小文治も登場し、妹初菊が居合わせていない事を不審がる。ぢぶ太夫は、三百両が初菊を殺して奪った金と告白し腹を切ろうとする。小文治は忠義故の殺人であるとし、ぢぶ太夫の「自害」を止める。ここでは、ぢぶ太夫は自害を止められた為に死に至つてはいないが、やはり生死の問題に関わっていると判

断される。

もう一つ『三輪丹前能』（享保六年正月二十日）三段目切の例を挙げてみたい。摂津国武庫郡の受領職富古の娘若草姫と家老曾根松大学の娘雲井は傾城に身を売られ、藻倉、高橋と名を変えて廓勤めをしている。そこに雲井の兄大木之介が訪ねる。大木之介は二人が廓を抜ける思案を尋ねると、雲井も話があると言い、一旦兄を橘屋に同道し、小座敷へ隠すことにして揚屋へ入る。雲井は大尽客の許で身の上話をしして泣き出すと、大木之介は次の間で様子を「立ち聞き」し、かどわかった悪人を憎む。大尽客は雲井の話を聞いた後、亭主に雲井の「身請け」を依頼し、皆々退出する。残った雲井は若草姫に打ち掛けを着せる所、大尽客が現れ着物の紋に不審を抱いて雲井を問い詰める。要領を得ない返答に大尽客が怒り、雲井を打ち叩く。そこに堪らず大木之介が現れ、大尽客と争いに及びそうになる。しかし二人は実氣に戻り仲直りとなり、互いの正体を明らかにする。大尽客は河内国鐘馗滝五郎であり、所縁の者であった。滝五郎は若草姫と雲井の「身請け」を済ませた証文（「文（書き物）」）を披露し、皆で喜ぶ。そこに姫、雲井をかくどわかった四六兵衛とだら介が現れ、姫と雲井を誘拐しようとする。大木之介らは取って伏せ、頼んだ者の名を問ひ糺し、黒幕が家老曾根松大学と知る。四六兵衛らを斬った大木之介らは二階に向かい大学を呼び立てると、突然大学は「自害」し本心を語り出す。大学はこれまでの悪事を詫び、後の事を頼んで果てるといふものであった。

この切では、大木之介が次の間で雲井の身の上話を「立ち聞き」する趣向が仕組まれており、更には大尽客による雲井の「身請け」へと展開する。^{注8}また、四六兵衛とだら介を「殺害」する事件もあるが、ここでの二人の殺害は非常に軽く扱われている。ところが、次の大学の「自害」が大きな趣向として展開しており、重要な見せ場となっているのである。

紀海音の「場」と趣向

さて、以上指摘した趣向は、必ず全てが「廓」の場に仕組まれるというものではない。それらが適宜選択され利用されているのである。「文」の趣向は、他の作品では『曾我姿富士』四段目中や、『甲陽軍鑑今様姿』一段目切にも利用される。「身請け」は『甲陽軍鑑今様姿』一段目切を除き、全ての作品に利用されている。これは元々「廓」における基本的な趣向とされていたと考えられる。「廓」の場で最も劇的に利用しやすい趣向であったのだろう。しかし、「廓」とはあまり相応しくないとと思われるような生死に関わる「殺害・自害」などのような趣向も常に利用されている。これは「廓」の場全てに共通して仕組まれているのである。

ところで、近松門左衛門は海音に先行して既に時代物に「廓」の場を設定していた。それは『三世相』三段目口・中、『大磯虎稚物語』三段目中、『吉野忠信』一段目中、『曾我七伊呂波』二段目切・三段目切、『日本西王母』四段目口、『曾我五人兄弟』三段目中・五段目切、『団扇曾我』一段目切、『けいせい反魂香』中之巻口・中、『傾城吉岡染』中之巻口、『曾我扇八景』中之巻口、『曾我虎が磨』上之巻切、『賀古教信七墓廻』三段目口、『本朝三國志』四段目切、『傾城島原蛙合戦』二段目切の十四作品、十八箇所仕組まれている。^注ところが、これらの作品には海音の場合で指摘した「文」、「立ち聞き」、「身請け」、「殺害・自害」という趣向が複数で仕組まれるものがない。言うことは「廓」の場のこれらの趣向は、海音の特徴的な仕組みとすることができるかも知れない。但し、世話物を視野に入れば、近松にもそれらの趣向が幾つも揃う作品が指摘できる。一例として『心中天の網島』（享保五年十二月六日）上之巻切を挙げるのが最も適切であろう。河庄にて、侍客実は治兵衛兄粉屋孫右衛門と小春との会話を治兵衛が「立ち聞き」し、小春の不実を恨み抜き身の刀を小春目掛けて格子の狭間から突き掛かる。ここでは「殺害」が未遂に終わるものの、行為そのものは「殺害」の趣向と変わりがない。更には起請の交換時の、治兵衛妻おさんからの「文（手紙）」の

発覚という展開となる。また、起請そのものが「書き物」の一つとも判断できる。海音が時代物で利用した趣向を、近松は世話物の中で展開したことは、両者の「廓」の場に対する姿勢の相違を闡明にするものである。その相違の原因についての考察は、今後の検討課題としたい。

以上、海音の「廓」の場で共通する趣向が繰り返し仕組まれている事を明らかにした。表にして示せば次の様になるろう。

作品名	段	趣向
『鬼鹿毛無佐志鑑』	四	文・立ち聞き・身請け・殺害
『三井寺開帳』	中(中・切)	文・立ち聞き・身請け・切腹未遂
『曾我姿富士』	四	文・身請け・自害覚悟
『甲陽軍鑑今様姿』	一切	文・手討未遂
『傾城国性爺』	二口	身請け
『日本傾城始』	四中	身請け・他殺願望
『三輪丹前能』	三切	文・立ち聞き・身請け・自害
『坂上田村麿』	三切	身請け・刺違未遂

この様に見ると、「段」と趣向の関係以外にも、「場」と趣向の関係が明らかになってくると思われる。では、「廓」以外ではどのようなであろうか。そこで次に「庵室」の場を取り上げ、そこに仕組まれる趣向を検討してみたい。

「庵室」の場と趣向

『庵室』の場合は『小野小町都年玉』一段目中、『甲陽軍鑑今様姿』四段目跡、『新百人一首』四段目口・切、『殺生石』一段目跡、『義経新高館』二段目口、『日本傾城始』四段目切、『三輪丹前能』四段目中、『八幡太郎東初梅』四段目中、『東山殿室町合戦』一段目切の九作品、十箇所を設定されている。一段目が三箇所、二段目が一箇所、四段目が六箇所となる。

『甲陽軍鑑今様姿』（正徳五年秋以前）四段目跡では、武田大膳大夫晴信が信玄居士と法名して庵室に住む所、山本勘介を筆頭に家臣たちが集まり信玄に帰城するよう様々に「説得」する。家臣たちは説得が叶わない場合に備えての死装束の出で立ちであった。即ち、ここでは命懸けで「説得」という趣向となっている。この趣向は『三輪丹前能』四段目中にも同様に用いられている。『三輪丹前能』の場合、河内領主弓削判官重章の次男左京之進重行は、摂津国武庫郡受領職千町田左衛門富古の娘かほる姫との養子縁組の契約を結んでいたが、左京之進は元来出家願望の強い人物として設定されていた。ところが、一段目切でかほる姫は自害、二段目切で左京之進は出家し、後に玄寶僧都と名乗る。四段目中となり、かほるの義妹若草姫は太木之介、雲井の兄妹を共に左京之進の行方を尋ねわび、ふと庵室を訪れた所、偶然にも左京之進と邂逅する。太木之介は左京之進に千町田の家に戻り家督相続するように「説得」するも聞き入れられない。この時、太木之介は「うゑじにする逆も。御供申帰らずは八幡外へにじらじ」と言い放ち、妹雲井も「おなし身のかくご」をしているものである。ここでも『甲陽軍鑑今様姿』の場合と同様に命懸けで「説得」

するという仕組みであり、その説得の内容も「帰国」の勧めと同様である。

また、『東山殿室町合戦』（享保七年十一月一日）一段目切では、先の二例の趣向をもう少し捻った展開となっている。將軍足利義政公の御舍弟義尋上人が庵室に居るところ、將軍の使者として竹原八郎範勝が訪れ、義政公が義尋上人に家督相続をするようにとの旨を伝える。これに対し上人は断ると、竹原は是非にと執拗に「説得」を続ける。上人は「今生の対面是迄」と言葉を放ち奥に行こうとすると、竹原は上人の真意を確かめる為の謀であつたと打ち明けるというものである。一段目口で、義尋上人に下心有りと言ふと悪人方に讒言されたことを受けての仕組みである。ここでは家督相続の意志がないことを確認するという展開が付加されているものの、竹原が真意を明かす迄は全く同様の趣向であると言える。

もう一例、『日本傾城始』（享保五年七月二十一日）四段目切の場合を取り上げてみたい。播州斑鳩の領主橘左衛門尉光国の娘敷津前には頭基の中納言が聶君に定まり、国譲りも決定した。その後諸事件を経て、四段目切では頭基と敷津前は出家し、室積の山里の庵室に着き、庵の主の老女から悟りを示されることになる。老女は松垣の姫の幽霊であり、頭基の迷いを晴らそうと現れたものであつた。老女は、善悪二つなときは仏も凡夫もなく、また家を出るも国に帰るも同じ事と諭す。これにより頭基と敷津前は仏縁の告げと感じ入り、「帰国」することになる。次の五段目では悪人を処罰し、家督を無事に相続する展開となつている。この四段目切では、悟りを示すことにより出家から還俗するという道筋が設けられている。これも「説得」の一方と見なしてもよからう。以上の四例について纏めれば、高貴な人物が遁世し「庵室」に居る所、本来あるべき立場に回帰するように「説得」という趣向と言える。

「説得」という点に注目すれば、『義経新高館』（享保四年正月二十日）二段目口の場合も指摘できる。和泉の三郎忠

紀海音の「場」と趣向

平は庵を結んで親秀平の三年の喪に服していた。そこに妻花まきが狼狽の態で駆け入り、鎌倉殿より近日中に大軍の討手が来ると知らせる。軍評定の場合に三郎がいなのは臆病風を引きこんだとの当て言を聞き、悔しさのあまりに駆け付けたのであった。花まきは臆病者と言われては亡き親にも済まない、喪を破り来てくれるように「説得」する。しかし三郎は相手にしない。ところが、庵近くで落人らの騒動を目の当たりにし、花まきの知らせを事実と悟った三郎は急ぎ高館へ向かうというものである。遁世から還俗へという趣向ではないが、「庵室」での「説得」という方法は踏まえられている。

ところで、『日本傾城始』では老女が松垣の姫の幽霊として現れた。これと同様に『三輪丹前能』四段目中では、女は三輪明神として登場する。また、『八幡太郎東初梅』（享保元年正月へ推定）四段目中では翁媼は鶴となり、『殺生石』（享保十六年九月三十日以前へ推定）一段目跡でも「瓜二つ」の中宮（一方は妖怪変化）が現れることになる。この「瓜二つ」の女が現れるというのは『新百人一首』（正徳五年秋頃へ推定）四段目口・切にも見られるが、ここでは夢の出来事として仕組まれている。しかし、これは四段目という「段の性質」から展開されたものとも考えられる。^{注10}参考までに指摘しておくことにしたい。

また、『小野小町都年玉』（正徳四年五月七日以前へ推定）一段目中では「宿を借りる」という趣向が展開され、『八幡太郎東初梅』四段目中でも同様に「宿を借りる」という設定がされている。ただ、用例が二例であるため、これも「場」と趣向の関連の可能性を指摘するに止めたい。

では、近松の場合ではどうかであろうか。近松が時代物で「庵室」を「場」に設定したものは、『世継曾我』四段目跡、『二世相』二段目切、『主馬判官盛久』三段目切、『津戸三郎』四段目切、『大覚大僧正御伝記』三段目切・四段目口、

『せみ丸』四段目切、『大磯虎稚物語』二段目切・三段目口・四段目口、『本朝用文章』四段目口、『本領曾我』五段目切、『けいせい反魂香』上之巻切・下之巻、『酒吞童子枕言葉』二段目切、『兼好法師物見車』中之巻切、『大職冠』三段目口、『穰静胎内括』二段目切、『天神記』四段目切、『娥歌かるた』四段目中、『国性爺後日合戦』二段目口、『聖徳太子絵伝記』五段目口、『傾城島原蛙合戦』三段目切、『津国女夫池』四段目口、『信州川中島合戦』二段目口の都合二十一作品、二十五箇所^{注11}ある。この中で一段目に設定されているものはない。二段目は六箇所、三段目は五箇所、四段目は九箇所、五段目は二箇所、上之巻一箇所、中之巻一箇所、下之巻一箇所となっている。近松作品の場合は、「庵室」の場を一段目に設定することがない点で海音と異なる。逆に、海音が設定しなかった三段目に近松は仕組んでいる。更に言えば、三段目切にも三箇所に設定しているのである。但し、四段目の設定数が最も多い点については両者とも共通していると言える。

さて、この中で近松は海音の特徴として挙げた「説得」の趣向を二作品二箇所で利用している。一つは『津国女夫池』四段目口の場合である。源義輝公の弟義昭は出家して慶覚と名乗り庵室に暮らしていた。そこに海上太郎兼盛の案内で浅川左京太夫藤孝、御台所、若君らを連れて訪れる。海上太郎は慶覚に還俗し三好太郎を討つように「説得」する。慶覚は還俗を拒否すると、海上太郎は「御返答をしやうじのさかひと一心をすへたる男。実正詞にちがひはないか。」と詰め寄る。後、慶覚は還俗の決意に至る。ここでは海音と同様に將に命懸けの「説得」の趣向となっている。もう一つは『信州川中島合戦』二段目口で仕組まれている。山本勘介が信濃山中に隠棲する所、武田信玄が勘介を軍師に頼もうと庵室を訪ねて来る。勘介の母がそれに應對する。信玄は礼儀を尽くし軍師となって貰うように「説得」するも母に拒否される。それにも怯むことなく信玄は「主従していのけいやくいたさぬ其内は。信玄がかばねを此山

紀海音の「場」と趣向

にうづむ計ぞ」と更に「説得」を続ける。この後、勘介が留守であることが明かされるが、勘介が軍師となることを母が約束するという展開となる。ここでは勘介が出家から還俗するという設定とはなっていない。しかし庵室に隠棲する人物をそこから浮世に回帰させるという筋は同様のものと見なされよう。結局、必死の決意を以って「説得」するという趣向はこの両作品に共通したものであり、海音の趣向と同様と考えられるのである。因みに『津国女夫池』、『信州川中島合戦』は享保六年二月と同年八月、竹本座の初演である。海音の「説得」の趣向を持つ作品は『東山殿室町合戦』（享保七年十一月一日）を除けば、全て近松の二作品に先行している。この事から考えれば、近松の「庵室」の趣向は海音から何らかの影響を受けた可能性もあると推測される。しかしながら、近松の「説得」の趣向は数から見れば僅かであり、全体として見れば海音の方法とは異なっていることも確かである。つまり、海音の側から見れば、「説得」の趣向は海音の特徴的方法と考えて良いであろう。さて、海音の「庵室」の場を表に纏めてみたい。

作品名	段	趣向
『小野小町都年玉』	一中	宿を借りる
『甲陽軍鑑今様姿』	四跡	説得
『新百人一首』	四口・切	瓜二つの女
『殺生石』	一跡	瓜二つの女
『義経新高館』	二口	説得
『日本傾城始』	四口・切	説得 桧垣嫗幽霊
『三輪丹前能』	四中	説得 三輪明神
『八幡太郎東初梅』	四中	宿を借りる 鶴

以上見てきた様に、「庵室」の場では何らかの「説得」が展開されるという趣向が多く仕組まれていた。しかし展開の仕方については、単なる繰り返しとなつてゐるものではなく、それなりに変化を求めようとする海音の姿勢も見えてくるであらう。

「街道」の場と趣向

次に「街道」の場について考察したい。^{注12}「場」が「街道」に設定されたものを挙げると、『熊坂』一段目口（『熊坂』一段目）、『末廣十二段』二段目切、『山枿太夫恋慕湊』一段目口、『甲陽軍鑑今様姿』二段目中、『大友皇子玉座靴』一段目切、『坂上田村麿』二段目切の六作品、六個所となる。「街道」が「場」として設定される場合、ほぼ一段目乃至二段目に集中していることが分かる。

さて『山枿太夫恋慕湊』（正徳元年十月初後へ推定）一段目口では、奥州五十四郡の太守岩木判官政氏が家臣菊田民部らを供に、京へ参勤に向かう。行列を進める所、梅津の宰相の一行と出会う。梅津の宰相は勅使の役目の途中であり、政氏は下馬を求められる。政氏は民部に下馬を勧められるが、梅津の宰相に興味遺恨があるため「乗り打ち」にしようとする。この時、梅津の宰相は乗り打ちに対し皮肉を込めて「非礼を咎める」。民部は穩便に済ませたく、様々に取り繕うが全く無駄であつた。後の事件の発端となる場面である。

この「乗り打ち」の趣向は、展開が全く異なるものの『甲陽軍鑑今様姿』二段目中にも仕組まれている。山本勘介は武田家に仕えるため初登城の途次、勘介一行の前を小長刀を振り回し裸背馬に乗る女が通り過ぎようとする。勘介の供軍八は「非礼を咎め」下馬するように言い付けるが、女は馬に鞭を入れ駆け去る。軍八が呆氣に取られる所、続いてまた長刀を携えた女が馬に乗り駆け来る。軍八は「乗り打ち」の「非礼を咎め」馬を止めようとするが、女は急ぎの用があると言い、一鞭打って駆け去る。更にもう一人の女が現れると、軍八はもう構わぬと女を通す。立て続けに三人の女の「乗り打ち」を目の当たりにした勘介は、御家中の異変を察することになる。

このように『山樗太夫恋慕湊』とは趣きを異にし、後の展開への影響も異なるのであるが、「街道」という「場」で「乗り打ち」とその「非礼を咎める」趣向が仕組まれているのである。この「非礼を咎める」趣向に注目してみると、『大友皇子玉座靴』（享保七年正月二日）一段目切の「街道」の場で仕組まれていることが指摘できる。

『大友皇子玉座靴』では、天智天皇崩御して三年、いまだ皇位が定まらない。大友皇子と弟天淳王君との間に皇位を廻る対立が表面化する所、天淳君は多病を理由に仏道に入ると申し出る。その事件を背景に一段目切では、大悪不道の大友王子が天智天皇の形見の靴を葬りに山科へ行く所、折熊が天淳王君の馬の口を取り行き過ぎる。大友王子は礼儀も無く通り過ぎた事を咎め、立ち帰って這いつくばえと命じる。更に折熊の引く馬を引き渡せと責められ、遂に争いとなる。ここでは「乗り打ち」という仕組みではないが、「街道」で二者が邂逅し、一方の非礼の仕打ちを咎め立てするという点が共通している。また、「馬」を登場させる点も共通していると言えようか。

また、「街道」の場では「名乗り」の趣向も指摘できる。『熊坂』（宝永七年四月四日以前）一段目口では、牛若丸が秀衡に呼ばれ奥州へ趣く途中、近江路鏡の宿の夜道で瀕死の女性と出会う。月明かりが射すとそれが母と乳母の小萩

であつたことを知る。呆れ果てている所、刀に血糊を滴らせた男が現れる。牛若丸はその男こそ母の敵と思い込み斬り付けるが、誤解であつたことが判明する。その折、男の言葉の端から源氏の所縁と推察した牛若丸は素性を問う。男は容易く名乗らないため、牛若丸が先に「名乗る」。すると男は相伝の主に廻り会つたと喜び、今度は牛若丸に自ら「名乗る」というものである。

同じく牛若丸の登場する『末廣十二段』（正徳五年顔見世〈推定〉）二段目切の場合も同様に、「名乗り」の場面が見られる。牛若丸が金売吉次に誘われ奥州へ向かう途中、宿はずれで供養が行なわれている所に通り掛る。里人に訳を尋ねると女性が殺されたものと知る。しかし牛若丸がその女性の小袖を見せられた時、母のものと解る。牛若丸は母が殺されたものと思ひ込み、嘆き悲しみ自らの素性を「名乗」り、塚を掘り返し対面させてくれと叫ぶ。法師は盗賊が出るから急いで去るように忠告するが、牛若丸は聞き入れず敵を討とうと塚の後ろに隠れる。夜が更けると長範ら盗賊が現れ戦いとなる。牛若丸が長範を組み止めた時、長範が常盤を呼び出し牛若丸と母子対面となる。牛若丸は長範に素性を明かすように求めると、長範は自分が源氏所縁の家臣と「名乗」り、塚に埋められた身替りは娘千里と打ち明ける。ここでは、牛若丸の「名乗り」と長範の「名乗り」との間には応答性はない。時差が生じているのである。この点からみれば『熊坂』の場合と異なり、単に『熊坂』の趣向を踏襲したものではない。しかしながら、両者とも主従の関係を発見する趣向として「名乗」って素性を明かすという展開を仕組んでいるのである。

ところで、『坂上田村麿』（享保七年顔見世、又は享保六年顔見世〈推定〉）二段目切では、主従の關係に於けるものとは異なる「名乗り」の趣向が指摘できる。將軍坂上田村丸は凶賊悪路王を退治するため、大同元年小春月吉祥日を卜定し出陣する。山科に着くと日も高い時刻にも拘らず突然闇夜と変わる。そこに白髪のお翁が現れ、東国の城跡戦

紀海音の「場」と趣向

場を写した一卷を田村丸に与え、更に軍配の奥義を語る。語り終わると田村丸は老翁に素性を明かすように求める。老翁が「名乗」り終るとたちまち姿を消す。同時に空も明るさを取り戻す。田村丸は老翁を観音の化身と思い至るというものである。以上、『熊坂』『末廣十二段』『坂上田村麿』の場合は、「名乗」って素性を明かすという展開が共通しているのである。

では、近松の場合はどうであろうか。「街道」の場が設定されているのは『今川了俊』三段目口・切、『大磯虎稚物語』三段目切、『吉野忠信』三段目切、『本朝用文章』五段目口、『日本西王母』二段目切、『曾我虎が磨』上之巻中、『曾我会稽山』二段目切の都合七作品、八箇所となっている。三段目切が三箇所を設定されている点、海音の場合とは特に違いが際立っていると言える。

さて、海音の仕組んだ「乗り打ち」の趣向は近松の『曾我虎が磨』（正徳元年正月以前）上之巻中の一箇所に使われている。^{注13} 曾我五郎が北条時政を烏帽子親に頼む。元服し、時政に借りた行列を仕立てて母の許に向かう。途中女乗物と行き合う所、血気の徒士若党がその乗物に狼藉する。乗物から落ちた老女は五郎の母であった。この時母は、「乗うちせられ恥辱うけしといはれてはしゝたる人迄かばねの恥」として相手の名を聞き届けよと鬼王団三郎に命じる。鬼王兄弟は五郎に頼まれその場を取り成すが、勘当の許しは望めなくなるといふものである。ここでは海音の場合では扱われなかった親子間で起こる「乗り打ち」の趣向となっている。但し、先に記した様に近松はこの趣向を「街道」の場では一度しか仕組んでいない。近松の「場」と趣向との関係は、海音のそれと比較して特に強いとは言えないようである。逆に海音の関係が特徴的・個性的なものと考えることが出来よう。「街道」の場の趣向も表にして纏めておく。

作品名	段	趣向
『熊坂』	一口	名乗り
『末廣十二段』	二切	名乗り
『山姥太夫恋慕湊』	一口	非礼の咎め・乗り打ち
『甲陽軍鑑今様姿』	二中	非礼の咎め・乗り打ち
『大友皇子玉座靴』	一切	非礼の咎め
『坂上田村麿』	二切	名乗り

おわりに

これまで「廓」、「庵室」、「街道」の三つの「場」と趣向との関係について考察してきた。この他にも、例えば「小屋」の場で展開される「自ら身売る」趣向なども指摘できる。『三輪丹前能』三段目口では、旅路に踏み迷った若草姫と供の雲井が行き倒れ、情に小屋へ連れられる。後に悪人の四六兵衛とだら介が傾城屋らくやの与次を連れて登場し、若草姫らを百両で売る相談を纏める。若草姫は凄まじると自らの素性を名乗る。すると四六兵衛、だら介は、女郎に売らぬ代わりに高虎の許に連れ出すと告げる。悪人高虎の高札に若草姫を尋ね出せば百両の褒美が受け取れるとあったからである。雲井は思案の上、傾城に「自ら身売る」ことを申し出て、助命を依頼するというものである。また、『坂上田村麿』三段目口では、足の不自由な夫さぶと妻きぬたは、百両という大金を貯めるために精を出して働

いていた。ところがさぶは金の工面ができたと言い、妻が喜ぶ所に侍が訪ねて来る。そして百両を渡しさぶを連れ立とうとする。不審に思った妻が訳を尋ねると、さぶは「自ら身を売」り、今宵斬られる命と告白する。後にこの金が旧主宇都宮の神主氏春の娘みさほを、廓から請け出して助けるためのものだったことが明かされる。この場合は「身替り」の趣向の変形とも言えよう。しかしながらその「身替り」を「身を売る」ことによって成立させているのである。両者の展開は甚だ異なるが、「自ら身を売る」趣向にみすばらしい「小屋」を設定している点で共通しているのである。但し、用例数が二例であり、両者とも「三段目口」という同一の位置に配されている事は注意する必要がある。これは、『三輪丹前能』（享保六年正月二十日）と『坂上田村麿』（享保七年顔見世、又は享保六年顔見世へ推定）の上演年次の近接という点を考慮すれば、前作の踏襲という可能性も否定できないからである。しかしながら、踏襲とは言え、必ずしも「場」を同一にする必要はなかった筈である。それにも関わらず同一の「場」を選択した事は、やはり趣向との関係も考慮すべき余地はあろう。

以上、全ての「場」が趣向と緊密に結び付くというものではないが、幾つかの特定の「場」に関しては、その「場」に対応する趣向が仕組まれる事を明らかにした。「段」と「趣向」との関係についての考察は、浄瑠璃の総体的な把握には有効な方法であったが、一方で各作者の個性の問題を捉える視点も必要と思われる。本稿で考察した「場」と「趣向」の問題は、各作者の個々の創作方法を、更に言えば作者の個性・独自性を導き出す一つの可能性を持つものと考ええる。

注1 一般的に「場」と言う時、「ヲクリ」のような曲節で太夫交替が行われる一纏りの単位を指す場合がある。また、「三重」の曲節で

舞台転換される単位を小段と呼ぶ事もある。しかし、ここでは便宜的にその小段が展開される「場所」の意で「場」と呼ぶ事にした。^{い。}

注2 ここでは便宜的に「作者の仕組んだ類型的な素材・構想」という広い範囲を含めた意味で「趣向」と呼ぶ事にしたい。

注3 以後、初演年次は『義太夫年表』近世篇による。

注4 もう一つの場合として、言わば複合作用(例えば、一つの「趣向」が決定され、それにより「場」が選択され、その「場」によって別の「趣向」が仕組まれる等の場合)による成立も考えられよう。

注5 「場」の種類を纏めるに当って『浄瑠璃作品要説(2) 紀海音篇』(昭和57年3月・国立劇場芸能調査室)を参考にした。

注6 「道行」は、他の劇的展開を担う場面とは性質を異にしている為、ここでは除外した。

注7 「殺害」は実際には廓ではなく、廓から出て行った所であり、厳密には「場」を異にするとも考えられる。しかし「三重」での舞台転換はなく、「ヲクリ」が使用されており、実際には同一の「場」で行なわれたものであると考えられる。依って「廓」の場の趣向として扱うことにする。

注8 ここでは「身請け」の証文(「文」)も示されるが、証文自体が他作品のように重要な要件として取り沙汰される事はない。

注9 『団扇曾我』と『百日曾我』は該当箇所が同文の為、併せて一箇所と数えた。

注10 前掲書『操浄瑠璃の研究』で、四段目の趣向として「幽霊・夢・霊験・怪異・鬼畜・怨霊・妖怪変化」等を挙げている。

注11 『主馬判官盛久』と『盛久』、『酒吞童子枕言葉』と『傾城酒吞童子』とは該当箇所が同文の為、併せてそれぞれ一箇所と数えた。

注12 「街道」に類似する「道中」の場はここでは取扱わないことにする。「道中」の場では「乗り打ち」・「非礼の咎め」の趣向は仕組まれておらず、「街道」のみに設定されているからである。海音は「道中」と「街道」の区別を意識していたものと考えられる。因みに「道中」の場を列挙すれば『三井寺開帳』上之巻口、『本朝五翠殿』二段目口、『玄宗皇帝蓬来鶴』一段目跡、『傾城無間鐘』四段目切の四箇所を指摘することができる。

注13 『曾我虎が磨』の上演年次が『山姥太夫恋慕湊』(正徳元年十月前後へ推定)に近接すると考えれば、海音が近松の趣向を利用した可能性もあると思われる。